

911.56-H6127



1200500756619

911.56  
512  
D



始

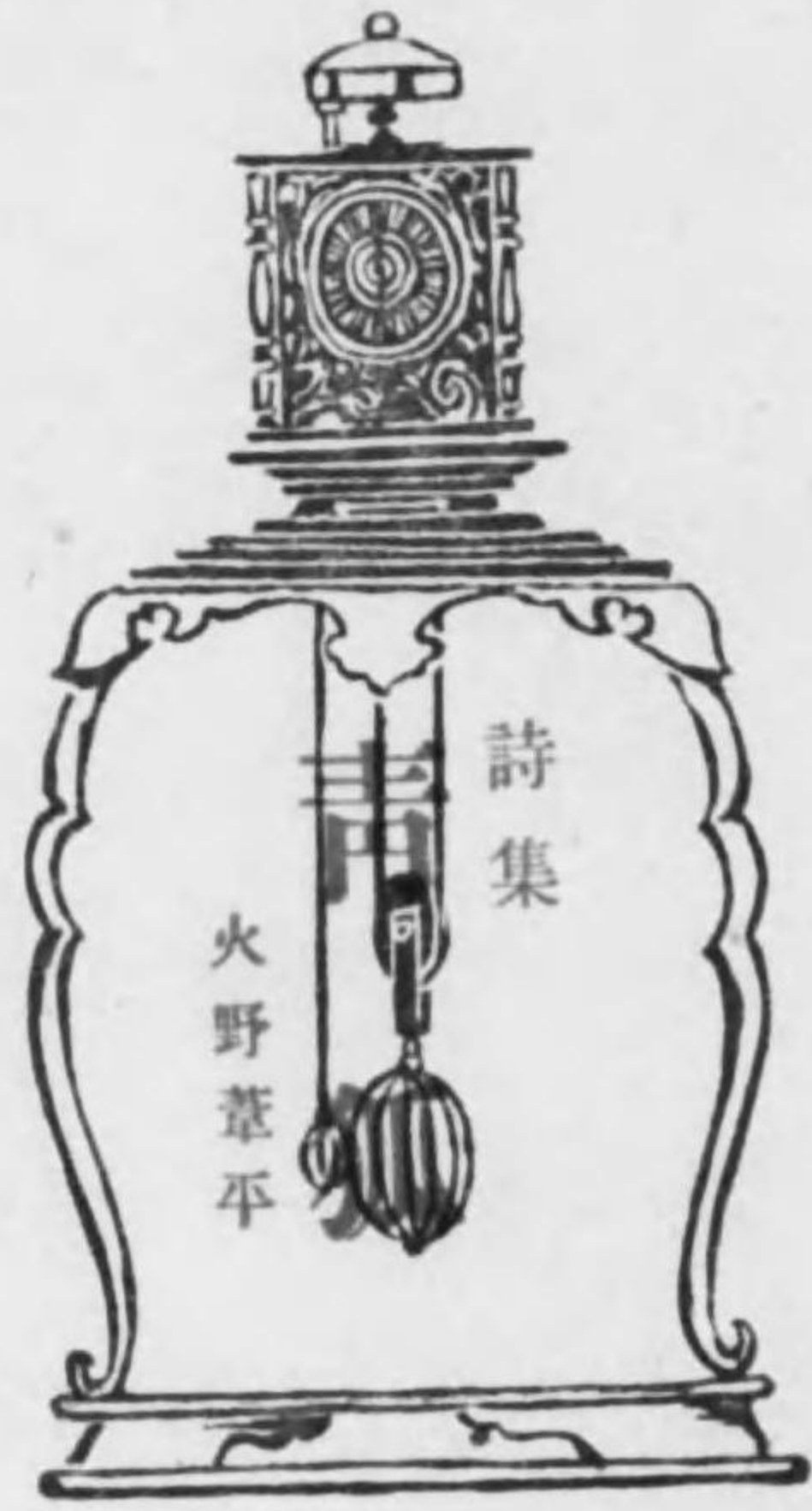


567

本文自二二頁  
至二六頁削除

六興商會出版部

911.56  
H612



963

74

青

狐

青 狐



深海の藍青色の毛皮につつまれて  
その耳は一枚の匂阿羅世伊止字のやうに立つてゐる、  
さういふ狐が棲んでゐる。

ばかばかしく大きな図書館のやうに  
その眼はさまざまの書物を蓄へてゐるやうにみえる、

さういふ狐が棲んでゐる。

白い鬘體を頭のいただきにのせて北斗星を拜めば  
いつでもどんなものにも化けることができる、  
さういふ狐が棲んでゐる。

日本の振袖の裾模様のやうに古風で美しく、

ときには眞晝間軒端に吊された岐阜提灯の光のやうに

ものかなしう、

さういふ狐がわたしの心のなかに棲んでゐる。

わだつみ

かの青狐こそは

月の夜に深きわだつみを潜りて來りたれば青し

われは

かのをとめ子のため深きかなしみを潜りて來りたれば青し

ためいき

今宵もわれはこの山のべをさまよひて  
いたましき青き狐をば見き。

そが織きまなこは哀しびにうるみて  
けはひもなき山のべにあのとをばしのびぬ。

月さむきぎんいろの芒のかけにうづくまりて  
青き狐はためいきをばしき。

壁上青狐圖

わたしは今日もこの壁のうへに青い狐を畫いてゐる、  
耳の尖つた憂鬱な狐を。

さうしてわたしは土筆のやうに瘦せてゆく。

・昨日もわたしはこの同じ壁上に青い狐を畫いた。

一昨日もわたしはこの同じ壁上に青い狐を畫いた。

一昨昨日もそれから一昨昨日も。

いやもうわたしが記憶を失つてしまつたほど遠い遠いむ

かしから毎日毎日。

さうしてわたしは今日もこの同じ壁上に青い狐を畫いて  
ゐる。

わたしは毎日一匹の青狐を畫きあげる。

すると翌日わたしが畫きあげた狐を見ようとして  
壁のところに行つたときには、

青い狐はいつの間にか壁上から姿を消してゐる。



そこでわたしはまたまつ白な壁の上に青い狐を畫きはじめる。

わたしはいつたい今までに何千匹の狐を畫いて來たであらうか。

わたしはこの不思議な永劫の努力のために土筆のやうに瘦せてゆく。

しかしながらわたしは倦まずに畫きつづける、  
耳の尖つた憂鬱な青狐を。

## 狐火

漁りせんとて舟を泛べたるに、海上にあやしき狐火を見たり。ながれ來るしろがねの月の光りに、ふはりふはりと、舞ひつをどりつ。海には青き水母のおよぎたれば、そは空中を游弋せる水母に似たり。しかはあれ、かりそめに、くろき雲にかくれるたる北斗星の、かなたのそらにあらはるとき、あやしき狐火は、花火のごとく、け

たたましくはじけ散りて、あなや、そは數知れぬむすう  
の青き狐の群むらとはなりつ、海上を飛び去りぬ。われは舟  
をうかべ、なほも魚をば取らんとせしも、その夜、一尾  
をも得ることなし。

戀こひ  
文ぶま

わたしは青狐にたのまれて戀文をかいてゐる。  
わたしはゆふべいつものやうに山をさまようた。  
すると青狐がわたしに戀文をたのんだ。  
いつぼん戀文こひぶまをかいてください。  
なにもむつかしい註文はありません。  
なぜならわたしも（と青狐はちよつとはじらふ顔になつ

て)

せけんみなせんちめんたるな戀をしてゐるのですから。  
青狐はさういふと白い風になつてすすきの下にもぐりこ  
んだ。

そこでわたしは青狐にたのまれた戀文を書く。

## 李 花

ほそい新月の薄あかりのなかに白い李の花が浮いてゐる。  
結晶したなげきにも似た一九二七年の李花。

まいにち一輪づつ減る李の花をたれも氣づくものはない。  
しかしながら一りんの李の花はどれだけのよろこびをか

れにあたへたか。

かれは毎夜山かけから出て来てあしおとをしのばせて、  
ひどく胸をおどらせながら一りんの李花をちぎる。

ほそい新月の薄あかりのなかに白い李の花が浮いてゐる。  
こよひもあをぎつねは李の花をぬすみに来てゐる。

北 斗 星

あをぎつねはすすきのかげにたちあがつた。

いらいらした表情でのびあがつた。

かれの手には白いされかうべがうつろな眼窩めだまを見はつて  
ゐる。

あをぎつねはのびあがつて、かなしさうにためいきをし  
た。

かれはうつくしい童子に化けようと思ふ。

しかしながら今宵は雨もやう、

さつきからずるぶん待つのに北斗星が見えない。

あをぎつねはそこでうんめいといふことについてめいさ

うし、

すすきのかげにうづくまつた。

ああ。うつくしい童子に化けたい。

あをぎつねはたちあがつた。

しかしながら北斗星はなほ見えるけしきもない。

かれが哀しきでむねをいつばいにして

それでももうしばらくしたら北斗星もみえようと思ひな

がら

されかうべをだいいじさうにかかへなほすと、

ぼつりと一しづく雨がされかうべのひたひにおちた。

青狐跳躍

茂みのなかから胡桃の果をとらうとしたのだ。  
わたしは谷をのぞきこんだ。

ああ、なんといいふふしきな情景だつたらう、  
まつ白い霧のこめてゐる谷の底に  
じつにむすうの青狐が跳躍してゐる。

はねてゐる。  
をどつてゐる。  
とんでゐる。  
はしつてゐる。

なんの音もないが、じつににぎやかに。  
まるでこの谷は青狐で沸騰してゐる釜のやうだ。  
ふつふつとたぎる青い泡なみ。

いつからかれらはかうして跳つてゐるのか。  
いつまでかれらはかうして跳つてゐるのか。

わたしの噛んだ胡桃の實はふしぎな味がした。

わたしは舌に妙にねばつくものをかんで唾した。

ねばつこいたいしやいろのつばきが出た。

わたしは腹が立つて嘔吐をかんだ。

わたしは白い霧のこめてゐる谷の底をのぞきこんだ。

をどつてゐる。

をどつてゐる。

をどつてゐる。

をどつてゐる。

えたいの知れないよろこびに有頂天になつて

かれらの目は白葡萄酒の鱧のやうだ。

かれらの耳はうどんげの花のやうだ。

かれらの四肢はまるで電気人形だ。

いつたいなにがそんなにうれしいのか。

をどる。

をどる。

星

くうきのごときやはらかきころもてるいつびきの青狐  
は死したり。

あいらんのあをぎつねら、かれがためにつかあなをば掘

りぬ。

ひねもす、かれがために、さむき冬の夜をこめて

かれらはかなしきもくたうをばしき。

かれらつらなりて月もなき空をばあふぎはかなき星くづ

をばかぞへ、

そが敷をばかれがつかあなにたむけにき。

さればそはかず知れぬ青き昆虫となりて

みそらなる星のかなたへかへりけり。



梅花

山のべに  
われはみし  
つらなりて  
花の咲けるを。

梅にて

色は青しや  
かしこより  
ここに咲きたり。

さればそは  
あをききつねの  
忘れたる  
足跡<sup>あしあと</sup>ならずや。

乳房

かれはおのれの青い乳房をまさぐつてゐる。  
なやましいふしぎの情念がその乳首ちくびのしたからのぞいて

ゐる。

すべすべしたたなごころのふくらみに

いま白木蓮の花にたかんしよくがながれ、

青狐はぢびたにねころびざんにんの情念に酔ふのである。

薊花

あをぎつねは行きつもどりつ。あざみの花ふみて行きつ  
もどりつ。薊なればそがやはらかき足のうらにはとげも  
たたむ。痛からむ。待てども来らず。

月も出でてふたとき、かれがほそき影いよよ細く、短く、  
もはや来ぬにや。さはれ待たむ。薊あざみの花は痛けれど、ひ  
たぶるなるかれがこころなれば。あをぎつねは行きつ、

もどりつ、薊の花ふみて涙ながしつ。

あをぎつねは月にもかたつて手をさしのべ、  
五つの爪をひとつづつながめて哀しんだ。

爪

あをぎつねは野薔薇のしげみにうづくまつて、  
野薔薇の白い花びらで爪をみがく。

あをぎつねの尖つた右の耳さきにあつた月は、  
いつの間にかかれの尖つた左の耳さきに来た。

あをぎつねは野薔薇のしげみにたちあがり、  
こころをどらせながら月にむかつて手をさしのべた。

あをぎつねは五つの爪をひとつづつながめて喜んだ。  
空にはたつたひとつの月、かれの爪には五つの月。

### 落 日

しめつぼい沼のみぎはにぞんざいにしげつてゐる葦あしの  
けから

ひよいとのでいてひつこんだ魚の表情に

落日がをとめのやうなやさしいはぢらひをちりばめた。

されば、水のほとりに沈みゆく落日をあびて

せんちめんたるな青狐は泣くのである。

青狐の哀しんでゐたわけ

多分月のいい秋の夜のこととせう。いつびきの青狐が哀しんでゐた。

青狐は芒のかけをさまようてゐた。すると芒はすばらしい小夜樂をかなでだした。しかし青狐は芒が音樂に興味をもつてゐないことを知つてゐた。風の吹く日には芒は

輕い *ANDANTE* を口ずさむことはある。しかしながら芒自身はそのむりに口ずさませられる *ANDANTE* をいつもりつぶくしてゐた。青狐はぬぐひさられた憂鬱のおれいをいふために芒のなかに音楽家のすがたをさがしもとめた。月はあるいし、うつくしい小夜樂せれはもてはたえまなく聞えて来る。青狐はすぐに音楽家のすがたを見つけだした。月はましやうめんから音楽家の顔を照らしてゐた。それはもちろんいつびきの鈴蟲であつた。青狐はおどろいた。青狐は音楽家の顔をまじまじと見つめた。なんといふ途方もない顔だらう。すべすべしたひらべつたい顔に、か

つかうの悪いふたつの飛び出た眼がついてゐる。鼻はいつたいどうなつてゐるのだらう。さうして——それから青狐は見る勇氣をうしなつた。青狐はなんにもいはずに立ち去つた。

月光と青狐

1、つはぶきのまろき葉に、すくへば、しろがねの月の  
ひかりは水銀、のめば青狐はいよよ青し。

2、水のほとりにおちて、風なければ、まつたき姿をと  
どめぬ。三日の月は睡のごとく、かかる夜は青狐は  
湖をばおそれぬ。

3、青き狐は月をば夢にみることなく、月は青き狐を夢  
みることなし。

4、かなしびて命うしなへる青き狐のあたまに、月の光  
はふしぎなるほのほをばもやしつ、青き狐の頭蓋骨  
にぶらちなすじを引きておちたる星ひとつ。

5、ぬすみたる月光を、笹のかけにうづめたれど、そは  
銀の羽蟲とはなりて、おともなき羽音たて、山の端  
はに月しろの出づれば飛びあがりつ。





十五夜の月。潺湲。銀の鱗。流れに足をひたして、すば  
らしい歡喜に青ざめながら、月を見つめてゐる孕み  
狐。

3

赤い鼻緒の切れてる雪駄。青狐。

木 犀

毎夜この木犀の木かげにしので来る青狐。  
なにかしらおそろしいやうでもあるし。  
それでゐてはなれがたいなやましい情念に身をなげかけ。  
ふしぎのかひなにしつかりと抱きすくめられて。  
青狐はやるせないなやましいためいきをする。

拾つたもの

あをぎつねは首をひねりながら歩いてゐる。

草の上にはほそいほそいみちがついた。

あをぎつねはひろひものをした。

青く光る丸いもの。

手にとつてみると雲のやうにふわふわと軽い。

いつたいこれはなんだらう。

それにしてもなんといふ美しいものだらう。

食べるものでもなささうだ。

いつたいこれはなんだらう。

あをぎつねは首をひねりながら歩いてゐる。

草の上にはほそいほそいみちがついた。

役に立つものでもなささうだ。

だがこんな美しものをどうして捨てられよう。

あをぎつねは大事さうに両手にかかへて

首をひねりながら歩いてゐる。

小曲斷章

Faint, illegible text on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

あをぞらをみつのおもふ  
はかなきはそのあまりなるあをさかな  
あまりにあをければわれはまなことぢ  
おもへばきみがひとみにひとひうつりしあをぞらの  
こんべきのひかりわがまなこくらますかな  
せんかたなくてわれはまなこみひらき  
あをぞらをみつのおもふ

おもふことのただかなしければ  
わすれんとひとりちかひしが  
ふともおもひいづればひとしほにわすられず  
こひしさのあまりふみをかき  
ふみをかき ふみをかき  
おもふひとのいまはこのよにはなきを  
われはひねもすふみをかき

3 かんざし

ある日きみはかんざしをうみにおとせしが  
そは銀ぎんのさかなとなりてわだつみにおよぎいでしか  
われはいくたびかかはうそのごとくもぐりすめども  
わがもとめるかんざしはあらじな

4 蜃氣樓

ふねがゆくぞ  
しんきらうのごとくうけるはなんのしまか  
きみのゆきしたいれんといへるまちは  
なんびやくりといふうみをへだつるといふに  
みよ かしこにしんきらうのごとくういてみえるぞ

5 船 蟲

わがせんちめんたりずむはふなむしのたぐひなり  
かくれすめどもなみにのる

あはれさびしききみなりしが  
ばつくにはさくらをかきてよといへばるがきぬ  
きみなくてきみがゑすがたに  
れうらんとたのしげなるさくらがかなしや

ちきゆうぎをくるくるとまはし  
ふらんすにゆかんといひしきみなりしが  
われをおきてきみのゆきたまへるよみのくには  
ふらんすゆきのびんせんはありやなしや

いまはなききみなれども  
われはあめはれしにはにただずむ  
くろきひまはりのたねのごとく

しつぽくのありのむれはむらがりあゆむ  
やさしかりしきみのいかにしたりけん  
ごむのせつたもてありのむれをふみなじり  
おそれおののきてにげまどふありのむれをながめて  
わらひたまへることのありぬ  
おもひいでつつ  
われもそのかなしきざんにんのわらひをわらふ

りたましひ

うりしにはあらねど  
われはかのたましひうしなへる博士<sup>はくし</sup>せんすべもしらねば  
ただどれいのごとく

10 一輪ざし

きみがたまへるいちりんざしのぎんの手はおちたり  
水にひたせばぎんいろのいんきとならん  
かかればわがつたなきふみも

きみがたまぐきのごとくあはれふかからんを

11 夢

せめてはゆめにみんとて  
日ぐれよりいねしはいくにち  
みしはわがどろぼうとなりて  
ひとのものたらんとするあさましきゆめ  
あはれゆめのみはせんなし

12 あるばむ

びらうどのあるばむ  
きみのほりたまひければもとめけるを  
きみまかりて  
われはいくにちをよみにかよへるゆうびんきよくさがし  
もとむれども  
けふもまたむなしかりし

13 幽霊



ひとのおそれるいうれいといふもの  
われもおそれるにはあらね  
なごきみがいうれいばかりおそれむ  
あはれ ねがはくば  
わがまくらべにひとよをばあそびたまひね

14 指環

ただずめばじゆんきんのゆびわひかりかがやき  
きみがかしらもじほれるはうれふ

わがゆびにささんもはづかしく  
おもひいづればかなしきことのみおほかるを  
なかなかになくもがなとはおもへど

15 寫眞

なきひとよをかしからずや  
わがまへにあるはわがつまになむとてもたらせる  
かずかずのをとめらのうつしゑなり  
ひとのよのじょうぼんのならはしなれど

わがなげきはつきざるを  
なきひとよ をかしからずや

16 かなしみの小篁

みまかりしきみが  
おくりものは  
あまりにおほくかつはおもし  
さればわれはぜんしんもてささへなむ  
かなしみといへるじゆんきんのこばこそは  
よにもえがたきたうときたからなれば

17 夕陽

なにやらんうれしくもものぐるほしく  
きみとわれときみのメリとは  
くるめきてしづみゆく陽に  
ひたぶるにはしりしものを  
きみなけれど  
陽はけふもかしこにくるめさしづむ

18 しとね

あはれ きみゆゑに  
なやましくしづみゆく陽ぞ  
きみがめりんすのしとねのかげに  
きみなくてひかりのみただずめる

19 くまそたける

あはれ きみゆゑに  
あかしあのはかげにものおもふみとはなりぬ  
くまそたけるのすゑなるつくしのますらをのこが  
このなやましくかなしきすがたや  
あはれ きみゆゑに

20 白木蓮

このはるもしろきもくれんはさけり  
めづるひとなくて

ほのぼのとしろきかなしや

21 柿

あはれ きみよ

さる秋はきみとはめりし

こんねんはざうげざいくのかきはみのらず

22 守 錢 奴

わがなげきをばひとはしらず

われはかのしゆせんだのごとく

よふけぬれば

ひとりじゆんきんのなげきをみなぐさむ

23 白 蟻 の う た

はくらふもてゑがけるほうわうのかなしきくまどりや

ならん日にはわがまづしきてえぶるに

なつかしき手すさびをのこしたまひね

かかればわがうたは  
いやふかくうつくしく

24 流・星

ほしならばはかなきりゆうせいならんこそ  
ひのごとくもえてきえなんころこそ

25 羊 菊

うつくしきようかんのはだえに  
ようじもてきみはわがなをほりぬ  
さて わらひつ  
ひとくちにのみほしつ

26 コオヒイ

コオヒイこそはかなしきのみものなり  
いみじくかはきをいやせるも  
なにやらんににて

いれものゝそこにあをきものがのこる

27 葦

ごといふものはむつかしきあそびなれども  
いしはしろきかひがらくろきかひがら  
もてあそべばみしらぬはまべにゐるこちすとて  
きみは ひねもすを  
をとめのごとくいしならべくらせしが

28 壺

かへでいけたるかちいろのつぼは  
みにしろきかひがらをつけたり  
うみにありなんもの かれて  
まなつびのひのひかりにひかるがかなしや

29 なげき

なげかひてなげかひのつくるにはあらね  
せめてはぎやまんのきりかごに  
わがあるばかりをみたさばや

30 青き薔薇

あらびあのそのふにさくといふ  
ふしぎなるあをき薔薇はわがみざれ  
なつによにもてあそべりしはなびのひかり  
ふともうかびいでしきみがおもわは

あらびあのあをきばらよりもあをかりし

31 晝題

わがぐわだいのなきをなげけるを  
きみはかんざしをぬきてりんごのはだえにさしぬ  
あはれ  
かくもいみじくさかしかりしきみははや

32 マンドリン

きみなくてこのつきのよを  
かなでづるまんどりぬ  
わびしらのしらべなれど  
おとばかり こちたしや

33 夢

ふともみしはかなきゆめの  
なにゆゑにかくもわすれがたきな

84 一寸法師

よもすがらわがよのはらをおるけるは  
ねがはくばきみのゑすがたのくちきかんすべ

もがなとて

いつすんほうしをさがしもとむ  
ととのへたるぶらちなのとけいの  
いくよさをめぐりあはねば  
こちたきはこちこちとせこんどをきざむおとなり



はるとしいへばたのしかるを  
きみなくてはるにわらはんすべもがな  
きみなくてはるにわらはんすべもがな

ふらんすにゆきてむみやげには

やはらかきはねぶとんをといひてけらずや  
さるをいたましやな  
きみがねむれるはこごしきいしぶとん

おもひいづることのかなしければ  
われはたびぢにのぼらばや  
わがちいさきばすけつとには  
きみがかたみのじゆんきんのこばこをおさめたり

きみがたまへるいちりんざしにはなをたやすな  
されどこよひのみは  
わがこつぶとなりてあかささけをもる

きみがひがさにねこをゑがけり

べるしやにはあをきねこすむといへれど  
むらさきのねこはいづくにや  
そがぎんのひとみはきみににたり

べるしやにはあをきねこのあるといふ  
ほるといへどよしなや  
せめてはゑがきてむとてゑがけれど  
ものいはざればよしなや

きみがやめるかほをしろきといはんはせんなし  
とうめいにしてほそければ  
そはかなしき蠶にいたり

夜となればたへがたきものを

さうらうとまちにさまよひいでさまよひありき  
あかるき灯もとめありくはまなつの蛾のころか  
されどみたまへ

この蛾はかふえにいりてあかささけのまんとするぞ

かたこひならばかはたれののにもいでてむ  
あきもはやくるといへば  
きぎはせうせうとはをおとさんものを

わがいうじうのころや

44 眞間の手古奈

かつしかのまゝのてこなはかなしや  
はるばるとこひしあれど  
みづのみはただつめたくして

45 水蜜桃

きみがいとこのめりしはするみつたう  
するみつたうくちにいれするみつたうのほほうごかしぬ  
きみよ きみがえがたきふたつのするみつたうはあたひ  
いくばくにや

46 空 氣

くまもなくあふれみなぎるもの  
ひとつにはくうき  
ふたつにはきみがころ

くうきははくじやうのきたいなれども  
きみがころばかりうれしや

47 化粧

たはむれてわがかほにおしろいをぬり  
まゆをひき  
あなかいらしのをみなごやなとてわらひしが  
きみなくてわれはわがかほにおしろいをぬり  
まゆをひき

80

かがみにむかへれば  
あなやせやせしかほはおそろしやな

48 齒

せつなけどいかにせんやは  
せめてはきみがみなほれるぎんのいちりんざし  
たうべんとはすれど  
わが齒ははがねならずして

81

49 うたかた

ひとのおもひをうたかたとないひそ  
うたかたならばおほいなるやまのごときか  
きえやらで  
かかる日をなげかひてすむ

50 指環

うれたくもやせたまへりな  
じゆんきんのゆびわは  
きみがおやゆびにもあまりてまはる  
さしいだせるをわれのさせば  
わがほそきこゆびをかみてうごかず

51 薬びん

はるはもくれんのはなにくれるを  
ここばかりかすかなるかはたれのひかりに

あをきくすりびんはひかる

52 カンナ

まどべなるはきいろきつきみさうなりしが  
ねつにうけるきみはちからなきひとみさして  
ああカンナのはながとてうれしみぬ  
さればきみよ  
われはきみがてにきいろきカンナのはなをまゐらせむ

53 陰陽師

わがこひはかなしとは  
こざかしきおんやうじのいへりしことなりしも  
なにやらんきになり  
こざかしきおんやうじめとはおもへども  
なにやらんきになり

54 雀

ついとわがへやへまよひいりしすずめを  
わがとらへんとすれば  
はげしくとがむるめして  
われをみつめるしきみなりし

55 パンジー

きみがたまへるくろきたねまきければ  
むらさきのばんじいははなさきぬ  
いととして

いちりんをぎんのいちりんざしにさせば  
はやけふはかるもよしなや

56 月

月のよにはまべにきたりて  
わらはべのごとくうみにいしなげいれつ  
きみなければ  
かかるよは月こそはなくもがな



けふもまたふみかけどかひなしや  
きみなければせんなくわがふばこにをさめんとすれば  
わがふばこにはかなきふみはあふれぬ

いかめしきときはぎはいのちながかれど

うつくしきはつゆのいのちぞ  
はななればめでつるものを  
さくとみてはやもちりにし

あかきともしびひかるかふえに  
いろあをきベバアメントのさけのめば  
すずろなるわがこころなれ  
よへどもなげきはつきざるを

またよはざればかなしけれ

60 梨花

なしのはなのしろければとらんとて  
さしいだせるかひなはなしのはなよりもしろしや

61 ひなぎく

きみがおもひのこまやかなれば

たとゆるすべのあらざりき  
ただとほけれどわがきける  
いづこともよりなきひなぎくのかほりのみ

62 くちびる

きみがゑすがたをゑがかんとて  
きりぎりすのごともやせやせしわれ  
くちびるにあかきいろつければ  
しとどにもくだるなみだなれ

ゆきゆけどはてなからまし  
はてはなくともみちのみはありなむ  
わがたびはあてもなければ  
ちいさなるばすけつとひとつかいだきて  
くものごとくゆきゆく

きみはわがはおりをぬふ  
はりもてるほそきゆびは  
ほそぼそとしなひつつわがはおりのうへをすべる  
うつくしきかしににたれば  
わがあいれんのしよくよくはわりなしや

ふともおちたるいちりんざしのぎんの手はいづくにや  
そはぎんのこんちゆうとなりて

きみがはかのべにはひいでしか  
いづればきみがはかのべに  
つゆのみぞしとどなる

66 なげき

あはれあはれきみよ  
きみなくばなげかんわれときみしれど  
かくばかりふかきなげきをなげくとは  
なききみよ しるやしらずや

67 つまぐれ

あはれなになればさはうれへたまへる  
なになればさはなみだしたまへる  
ゆゑしらねど  
かなしきはきみがむしんなる手に  
もぎくだかるるあかきつまぐれのはなぞかし

68 犬

ゑふでをとり  
わがゑすがたをかかむとてゑがけりしが  
そはころなくいぬにいたりき  
さればきみはわがうでをとり  
ゆるしてよとてあやにくになけりし

69 花 環

はるののべにきみとつみつつあめるはなわはいまはかれ  
たれども

きみまかりてこの月  
くろきりぼんをむすべば  
みたまはずや  
うらうらとしぼめるはなはひらける

70 惜 春

をしめども  
はるはかへらず  
なげけども

ひとはかへらず  
かへらざる  
かなしみばかり  
ひねもすそ  
わがむねをかむ

71 水母

月なければわれはくらきうみべにさまよひいで  
月なければわれはあふれいづるなみだをぬぐはず

98

あをきひかりしてなみのまにたゆたへる水母くらげのむれの  
かぞふればひとつふたつみつよついつつ  
あはれそはありし日にきみと捨てては投げぬはまの石の  
かなしき亡霊にはあらずや  
この春の暮るといふにわれはきみをばうしなひてはか  
なきなげきをぞするに  
これをしもひとびとはひとのよのならばしといふ

72 九官鳥

99

ひねもすこの九官鳥はたのしげにうたひてやまず  
朱あかきつまぐれのくちはしもて目がななきひとの言葉をか  
たる

73 投身

われは海にいりて死なんとてこのはまのべにきたりつ  
たなごころを十字にくみてつと身をばなげぬ  
さるをあさましやな われはくみたる手をほどきて  
魚のごとくぬき手をきりつ

かなしみは海にて青しといへるに  
なになればわがかくもかるやかにおよげる海のごとく  
わがかなしみのあをき海およぐをえてや

74 つはぶき

わがにはにきいろきつはぶきの花はさきぬ  
そは金のかんざしににてにほやか  
葉はまろきめづらしき櫛のかずかず  
さればわが庭はきみが頭かみづににたり

われは目くれに將棋さす

おもひいづる駒ならべぬししらうをのごとき手を

おもひいづる駒とりてわらへるかひがらのごとき齒を

おもひいづればわがころかなしかるを

あなやわが王はおひまぐられてつひに雪隠にはいるめり

白 木 蓮 花



梧桐の下

青き梧桐は繁りつ  
空も見えつ  
秋なれば葉落ち

蛸ひらしはうたひつ。

そが下には  
古き乳母車うほぐるまひとつ  
わらは子は今はたちなれば  
古びはてつ。

風なくて散りおつる  
梧桐のかれ葉  
地の上にかなでづる

そのかみの子守唄。

散りおつる梧桐の葉

黒き音符となりて

地の上に描き出す

ねんねの楽譜

長じては母にたがひぬ

ぜひもなや

梧桐の下に

涙しぬ。

山  
吹

1

山吹の花の七ななしほかはるとも  
きみかはらずばわれもかはらず

2

山吹の花の千しほにかはるとも  
いはぬ色をばわれわすれめや

3

山吹の花のころははかなしや  
つぼみで咲いて戀もせず

4

山吹の花は散れどもかひなしや  
ちらぬなさけのきみをなみ

# 欠

5

山吹の花の色香は失<sup>う</sup>るとも

きみがなさをわれはわすれず

6

山吹の花のなさをきみ知るや

きみかはるともわれはかはらず

# 欠

## 南 蠻 調

きみをおもへばわがこころ  
さんた・かららのあけの鐘

さんた・まりや

おらんだの船はうれしや  
うつくしききみがよこ顔

さんた・まりや

さまりやのびるぜんのみみ  
をろがみてわがぬかづけば

さんた・まりや

きみがためにはまるちりよ

きみがくるすに身を燦かむ

さんた・まりや

手

わたしはけふも洗濯をしてゐる。  
わたしの手は日に日に荒れてみにくくなつて来る。

それでもわたしは悲しまない。

わたしは信じてゐる。

救世主イエス・クリストを産まれた尊い聖母マリヤ様も  
きつと

寒い雪の朝には幼き救世主のおむつを洗濯するために  
その美しい花びらのやうな御手を冷い水にひたしたであ  
らうことを

さうして、お氣の毒にもマリヤ様の御手は荒れて  
みにくくなつてゐたであらうことを。

けれども、ごらんなさい。

ミケランジェロでも

ラファエルでも

マサッチオでも

それらのえらい畫家たちの描いた聖母の繪姿に

どの一つにでも

みにくく荒れた手が描かれてゐますか。

それらのえらい畫家たちの描いた聖母の御手は

この世のものとも思はれない天上の美しさを持つてゐる

ではありませんか。

それ故わたしは悲しまないのです。

わたしは心から信じるのです。

わたしの手は洗濯するたびに荒れてみにくくなるけれども

わたしが優れたよい詩を書きさへすれば

わたしの肖像を後に描く人があつても

わたしの手をきつとみにくくぶざまに描きはしないであ

らうことを。



わたしは心から信じてゐるのです。

蜘蛛

ある人に

この次の宇宙を支配するのは蜘蛛ださうです。  
H. G. WELLS といふ人がさういつてゐます。

ところでこんな話はいかがですか？

むかしむかしある人がある女の人に

「殉情詩集」といふ本を贈ったのです。

その意味がおわかりですか？

それから何年か経つて、例のやうに、時のやつが  
そのセンチメタリズムを片づけてしまひました。

ある日女の人は思ひだして「殉情詩集」を出してみたの  
です。

それまでこの美しい詩集は物置の中にあつたのです。

女の方はふいとめくつた本の中に大へんなものを発見し  
ました。

一匹の蜘蛛が押しつぶされて朶になつて挿まれてゐたの  
です。

ところで今わたしは少し意地の悪い氣をおこして  
この珍らしい栞をあなたに贈らうと思ふのです。

この埃<sup>ちり</sup>及<sup>まで</sup>にもない珍らしい栞は今わたしの詩稿の上にあ  
るのです。

お受け下さいますか？

たそがれ

たれこめて来る夕やみの中に白木蓮の花が浮いてゐる。  
わたしは木のまはりをなんべんもまはつてゐる。

仰いでみるとほそい梢には夢のやうにほやかな  
それ故にかなしい白い手がまねくともなくわたしをまね  
いてゐる。

このときのわたしのころは  
世の感傷的な人々が思ひ出を美しいとするころをかな  
しく思ふ。

この日のわたしはなつかしくなつかしい傳説を持つ白金の乞食  
それは夢のやうにまろやかで酸っぱい物語。

さうしてわたしはさびしい時にするわたしの癖をくりか  
へす。  
そつと懐中鏡をとり出して白く瘦せた自分の顔を見つめ  
る。

暮れなやむ春の夕やみのなかに白木蓮の花が浮いてゐる。  
わたしは木のまはりをなんべんもまはつてゐる。

學生の頃、われらは「聖杯」といへる雑誌をおこして、いささか詩作に勵むところありしが、うちに火野葦平は執心すること最も激しかりき。恰も今日の如く、次々に詩を作り、本名のほかに名を祕して、幾多の作品を發表し、絶えて倦むところなかりしなり。年少の常として、いまだ生活の經驗もなく、現實に身を沈むることなく、纖細巧緻の浪漫世界に住して、感傷に泥むことも多かりき。「青狐」の詩人が後年、次の如く述べたるは略々肯綮にあたり。

當時他の同人の誰よりもいちばん年少であつた私は、また、いちばん感傷的でもあつたのだらう。同時に、そのとき、私は自分の終生の仕事と心にきめてゐた文學の道を放擲しなければならぬやうな事情が身に迫つてゐたので、一層、私の心事を悲壯に考へたがり、その悲しみが必要以上に言葉になつてゐたかも知れない。そのころ、私は故郷のことを考へることが厭はしい氣持になり、室生犀星氏の「抒情小曲集」にあつた、

ふるさは遠きにおいて思ふもの、

そしてかなしくうたふもの、

たとひ

おちぶれて異土の乞食かたのとなるとても

歸るところにあるまじや

といふ詩にいたく共感し、私一個の氣持を托して、くりかへし誦し、「痛みほうけたるたましひをここに抱いて、わたしはむしろ異土の乞食かたのとならんこと」を願つてゐたのである。

然るに、葦平は程なく故園に還つて詩作を遠ざかり、あまつさへ文學一切を、自身の言葉をもつてすれば「廢棄」して、殆ど顧みるところなかりき。

再び文學の道に歸りしは、十餘年を経て、「糞尿譚」「河豚」等を發表せし時に屬し、その以後のことにつきては既に大方の熟知せらるる如くなり。

今日、本書中に收められたる詩篇を讀む者、ややもすれば今日の火野葦平の世界との乖離を感ぜらるるならむ。しかも世界は一あつて二なし。慧眼の讀者はよくこれらの浪漫詩にあらはれたる作者の感性が、直ちに「麥と兵隊」にはじまる一聯の作品にもつながることを認むらるる筈なり。まことに「青狐」の詩人が若々しく、夢多き浪漫世界より出發せるは決して徒爾ならざりしなり。

これらの作品は部數きはめて少き同人雜誌に發表せられしを、再び世にいづる機會なく打すぎたるものなりしが、本年早春、陸軍報道班員として作者が比島派遣軍に従軍するにあたり、われらが九州の友人原田種夫いたくこれを惜しみ、一卷にまとめて上梓し、南方の戦野に在る作者への慰問にもなさんと計畫し、ひろく作品を蒐集す

るところあり、すなはち本書の成るは主として種夫の盡力によるものなり。ここに蕪辭をつらね、今なほ比島に在つて、文化運動に挺身する著者の健闘を祈るとともに、いささか本書の來歴を記すと云爾。

昭和十七年冬 中山省三郎識。

昭和拾八年五月廿日印刷  
昭和拾八年五月十日發行  
貳千五百部

認承協文出  
7300328



著者略歴  
九州出身、早大卒、日本文學報國會々員。『麥と兵隊』等著名の作多し。

青 狐

定價 貳圓貳拾錢

著 者 火 野 葦 平

發 行 者 小 田 部 諱

東京市日本橋區本石町三丁目六番地

印 刷 者 (東京) 新 里 銳 三 郎

東京市牛込區榎町七番地

印 刷 所 大 日 本 印 刷 株 式 會 社 榎 町 工 場

東京市牛込區榎町七番地

發 行 所 株 式 會 社 六 興 商 會 出 版 部

東京市日本橋區本石町三丁目六番地

電 話 日 本 橋 五 七 八 九 番

文 協 會 員 番 號 一 四 三 五 〇 二 番

日 本 出 版 配 給 株 式 會 社 配 給

青 狐	
定 價	2.20
特別行爲稅	.08
相 當 額	
實 價	2.28
六興商會出版部	



96
74

終

